

女子短大生の「家族」に対する意識

永田 照子

I. はじめに

本年(1994年)は、国連の定めた「国際家族年」である。国連は1989年の総会で国際家族年を決議し、その具体的内容として1991年に宣言文を発表している。スローガンは原文では“Building in the smallest democracy at the heart of society”で、政府はこれを「家族からはじまる小さなデモクラシー」と訳しているが、樋口¹⁾は「そのテーマは、何よりも家族という社会におけるデモクラシーの確立、すなわち、家族の構成員間の平等であり、それぞれの人権の尊重である」と述べ、「国際家族年は国連の国際婦人年を含む人権活動の延長線上に位置づけられるものである」としている。宣言文では、家族一人一人の平等、女性、子ども、高齢者、障害者の権利の確立が繰り返し述べられている。そして、世界的な社会構造の変化の中で、唯一の理想の家族像の追求を避けるべきであり、家族を構成する人々の権利擁護と合致する新しい価値観をもつさまざまな家族形態、従来の血縁や戸籍に必ずしもこだわらない新しい家族などを考える時期であるとしている。

国連の「国際家族年」の主眼は人権の問題にあると考えられるが、時代の移り変わりとともに「家族」の意味や在り方が変化し、多様化している今、「国際家族年」にあたり、家族についてここで改めて考えてみるのは有意義なことである。

私たちは人生のうちで2つの家族を経験するといわれる。すなわち、まず、私たちが子どもとして自分の意志とは無関係に、ある家族のなかにそれこそ運命的に生まれ、育てられる家族(定位家族)と、自分の意志で結婚し、意識的に子どもを産み、社会化していく家族(生殖家族)である。どのような定位家族のなかで成長したかが、次の新しい生殖家族を作りあげていくうえに大きな影響をもたらすと思われる。

家族の機能として、マードック(Murdock, 1949)²⁾は、性、生殖、経済的

協力、社会化の4つを挙げている。また、社会学者、パーソンズ (Parsons, 1981)³⁾ は、家族の主要な機能は、子どもの社会化と成人のパーソナリティの安定化であるとし、この2つの機能は相互に依存している、すなわち、子どもの社会化がうまく行なわれるためには、成人(親)のパーソナリティの安定化が必要であり、その逆でもあると述べている。社会化とは、人が他者とのコミュニケーションを通して、所属する社会に適した生活習慣、行動パターン、社会規範などを学習し、それらを自分のなかに取り入れていく過程である。親による子どもの社会化で注目されるのは「しつけ」であろう。「しつけ」を通して親自身も親として成長するのである。

詫摩ら (1972)⁴⁾ は、今日の人々が家族に求める機能として、i 緊張解消による休息を求める場、ii 気兼ね無しに解放的に振舞える場、iii 子どもの社会化を促進する場、iv 性的欲求を公然と充足させる場、の4つを挙げているが、時代の移り変りとともにこれらは必ずしも家族のなかで満たされることが難しくなってきた、かえって家族外で満たされるようになってきているものもある。その原因として核家族化、少子化、離婚の増加、そして共働きの増加などが挙げられる。これらの要因が絡み合って家族の在り方が変わってきている。

そこで、本年は総合基礎科目で「家族の問題」を取りあげ、種々の専門領域から家族を考えてきたが(婚姻・離婚、家族の扶養、児童虐待、生命の誕生前後、住居環境、インドの家族形態、インディアン家族形態と歴史、ホスピス、家計、親子関係など)、最後に、女子短大生が「家族」に対してどのような感じ方、捉え方をしているのかを把握するため、意識調査を実施した。本稿では、その調査結果の分析、解釈を試みたい。

II. 目 的

家族の在り方が問われている現在、女子短大生が、自分の家族の人たちといかなる接触をもち、どのように感じているか、また将来の家族生活をどのように描いているのかを調べる。

III. 調 査 方 法

今回の調査の方法は次のとおりである。

(1) 調査対象者：本学女子短大生 297 名 (1 年次生 273 名、2 年次生 24 名)。いずれも総合基礎科目「家族の問題」を受講した者

(2) 調査項目

- (i) 家族構成
- (ii) 家族に対する態度
- (iii) 将来の生き方について（結婚について，仕事について）
- (iv) 将来の家族生活についての設計図
- (3) 実施方法：調査は集団で，無記名で行われた。
- (4) 実施期日：平成6年7月12日

IV. 結果と考察

1年次生と2年次生の間には特に違いはみられなかったので，以下の結果と考察はまとめてなされる。

(1) 家族構成について（表1，2）

4人家族が最も多く（50.9%），次いで5人となっている。きょうだいの数は，2人が65.7%で最も多く，3人，2人とつづく。両親と子ども2人という典型的な構成が本学女子短大でも最も多いことがわかる。

(2) 家族のなかで，普段よく話をする人（多い順に3つまで回答可）について（表3）

1番目に挙げられるのは圧倒的に母親（70.7%）である。ついで姉，妹とつづく。父親はわずか1.7%にすぎない。きょうだいでは，やはり同性の姉・妹ということになる。2番目でも同様の傾向であるが，3番目で父親，兄，弟の順で登場するが，無回答が多い。これは，4人家族で父親の帰りが遅いという場面の多いことが考えられるが，また，父親が居ても，この時期特有の娘の「父親嫌い」の傾向が若干あらわれているのかもしれない。それにしても父親とのコミュニケーションが少ないことがよく分かる。

表1 家族数

	人数	%
2人	1	(0.3)
3人	30	(10.1)
4人	151	(50.9)
5人	72	(24.2)
6人	31	(10.5)
7人	9	(3.0)
8人	1	(0.3)
無回答	2	(0.7)

表2 きょうだいの数*

	人数	%
1人	25	(8.5)
2人	195	(65.7)
3人	67	(22.6)
4人	9	(3.0)
無回答	1	(0.3)

* 自分を含む

表 3 普段よく話をする人

	1 番目	%	2 番目	%	3 番目	%
父	5	(1.7)	53	(17.9)	112	(37.7)
母	210	(70.7)	63	(21.2)	6	(2.0)
兄	7	(2.4)	23	(7.8)	21	(7.1)
姉	28	(9.4)	39	(13.1)	3	(1.0)
弟	9	(3.0)	39	(13.1)	20	(6.7)
妹	27	(9.1)	33	(11.1)	12	(4.0)
祖 父	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(0.3)
祖 母	4	(1.3)	7	(2.4)	6	(2.0)
その他	0	(0.0)	2	(0.6)	0	(0.0)
無回答*	7	(2.4)	38	(12.8)	116	(39.1)

* 多い順に 3 つまで回答可なので、2・3 番目は無回答が増加する

母親との会話が多く、父親との会話が極端に少ない理由については、後の調査項目の結果と合わせてさらに考察を試みるが、この結果は、今日のわが国において核家族化が進むなかで、専業主婦の家庭で陥りやすい母子偏重のコミュニケーションの型を示している。一方、共働きの家庭においては、一般に父母子均衡のコミュニケーションの型になってきているといわれている。「母親が就労している家庭では、父親と子どもとの結びつきが強く、とりわけ専業主婦の家庭より子どもの社会性や知的な発達はや早い、という調査も行われている。」と菅原は述べている⁵⁾。これは両親が共に子どもに対する関心をもつことによると考えられる。専業主婦の家庭においても、父親の家庭に対する意識によってコミュニケーションの型は異なるであろう。今回、母親の就労については調査していないが、筆者が 1993 年に行った本学での調査においては、母親の半数以上が何らかの仕事についているが、パートタイムの仕事が多い。したがって、父親より母親とのコミュニケーションが多くなるパターンになっている。

(3) 家族のなかで、最も気の合う人について (表 4)

母親が最も多く(44.8%)、姉、妹、すこし離れて父親の順である。無回答が 3.7%、「無し」と答えた人が 7.4%、「無し」のなかで家族のなかでと問うたにもかかわらず「友人」と答えている人が 3.4% いて、「無回答」と「無し」の合計が 11.1% になることは、次の質問の回答と合わせて注目されるところである。

表 4 家族のなかで
最も気の合う人

	人数	%
父	20	(6.7)
母	133	(44.8)
兄	12	(4.0)
姉	45	(15.2)
弟	16	(5.4)
妹	33	(11.1)
祖父	0	(0.0)
祖母	5	(1.7)
無し	22	(7.4)
(内友人)*	(10)	(3.4)
無回答	11	(3.7)

* 「無し」のなかの友人の数

表 5 悩みごとのあるとき家族の
なかで最初に相談する人

	人数	%
父	6	(6.0)
母	169	(56.9)
兄	3	(1.0)
姉	33	(11.1)
弟	3	(1.0)
妹	18	(6.1)
祖父	0	(0.0)
祖母	3	(1.0)
無し	54	(18.2)
(内友人)*	(30)	(10.1)
無回答	8	(2.7)

* 「無し」のなかの友人の数

表 6 悩みの相談相手

			友人	母	父	兄姉	同僚	団体の 仲間	学校の 先輩	先生	この中 にない その他	Total
			%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
男 子	高	校	68.8	36.6	25.3	11.6	0.9	5.0	5.2	10.0	8.0	171.7
	短大・高専		62.5	37.5	25.0	4.2	4.2	4.2	12.5	—	8.4	158.3
	大	学	77.4	26.3	21.9	9.5	2.9	18.2	16.1	5.1	4.3	186.9
女 子	高	校	82.1	37.2	12.8	13.7	0.4	7.7	8.2	6.8	3.3	179.1
	短大		78.3	48.3	15.0	18.3	6.7	6.7	5.0	5.0	3.3	193.3
	大	学	72.5	60.0	12.5	22.5	2.5	7.5	15.0	5.0	5.0	207.5
有 職 者			47.4	34.5	17.0	18.2	28.7	4.4	3.8	0.9	10.7	179.5

青少年対策本部「第4回青少年の連帯感などに関する調査」1985年より。

(佐竹, 1988より引用)

(4) 悩みごとがあるとき、家族のなかでまず最初に相談する人について(表5)

母親が最も多く(56.9%), 姉, 妹の順である。(3)と同様に, 家族以外を答えた人(友人)が10.1%, 「無し」が8.1%, 無回答が2.7%であり, 合わせると20.9%で, これは母親についで多い。

総理府青少年対策本部の調査(1985)⁵⁾を表6に示したが、それによると、悩みの相談相手として男女ともに「友人」が1位であり、家族のなかでは母親がもっとも多く、本調査と一致している。身近にいて、コミュニケーションが頻繁にとれる母親が、同性でもあり、気持が理解してもらえということであろう。

短大時代は、発達過程からいうとちょうど青年期にあたる。青年期は、子どもから大人への過渡期と捉えられるが、この時期は、「心理的離乳」あるいは「親の束縛からの解放の闘い」の時代として特質づけられる。しかし、一方では完全に独立できないアンビバレントな感情が葛藤や不安、孤独感をもたらし両親に代わって友人が依存の対象になり、全人格的な交わりを求めるのである。いわゆる準拠集団（或る行動の基準の拠りどころとなる集団）が家族から友人の集団へ移行していることを意味している。青年期後期になって親からの独立の度合いが高くなると、家族への思いやりやいたわりが生まれてくる。

戦後、青年期の期間が長くなってきたといわれている。青年期は何歳から何歳までをいうのか、については諸説があるが、一般には12～13歳から22～23歳くらいを指すといっていよいが、30歳くらいまで延長すべきだという説も出てきている。長くなったといわれる理由の1つに青年期の自立の遅れが挙げられている。そこで問題とされるのは、「母子密着の問題」であり、母子偏重のコミュニケーションが原因の1つといわれる。

これまでもしばしばいわれてきたことであるが、高度経済成長を背景に、家庭における父親の不在による父親の役割の弱体化、喪失を招き、母親が父親の役割を兼ねるという状況を招いている。社会化の担い手としての母親の責任はますます重く、父親像をいかに子どもに伝えるかが非常に重要となる。

このような状況が、女子短大生の時期の「準拠集団は友人」ということとあいまって、一層父親との触れ合いの減少となっているのであろう。

(5) 将来の生き方について

表 7 結婚について

	人数	%
短大を卒業後、早く結婚したい	34	(11.5)
何年か仕事をしてから結婚したい	227	(76.4)
結婚はしたくない	17	(5.7)
その他	19	(6.4)

表 8 仕事について

	人数	%
結婚したら仕事は辞める	49	(16.5)
結婚してもずっと仕事は続けたい	53	(17.9)
結婚後、出産したら仕事はずっと辞める	20	(6.7)
育児から手が離れたら再びフルタイムの仕事に就きたい	47	(15.8)
育児から手が離れたらパートタイムの仕事に就きたい	102	(34.4)
結婚・出産に関わりなく仕事には就きたくない	5	(1.7)
結婚・出産に関わりなく仕事を続ける	6	(2.0)
その他	14	(4.7)
無回答	1	(0.3)

結婚について（表 7）と仕事について（表 8）の結果から、何年か仕事をしてから結婚し（76.4%）、育児から手が離れたら再び仕事に就きたい（パートタイム＝34.4%、フルタイム＝15.8%）と考えている人が約半数いることが分かる。また、結婚後もずっと仕事を続けたい人が 17.9% いるが、とにかく何らかの形で仕事に就いていたいという願望がみてとれる。しかし、一方、育児の重要性も十分に認識されていると考えられる。「家族の問題」の講義において、乳幼児期における（量よりも）質の高い親子関係の重要性について何度も触れられていたことも関わっているかとおもわれる。

(6) 将来の家族生活の設計図について

この質問は将来の家族生活の設計図を自由に述べてもらうものであった。

卒業後すぐにでも結婚したいというごく少数の人たちは具体的に設計図が描かれていたが、大多数の人はまだ先のことという感覚であまり詳しくは述べられていなかったが、設計図はだいたい次のようにまとめられる。

短大を卒業したら仕事に就き、25, 6 歳を中心に 23 歳から 28 歳くらいの間に結婚したい。相手は経済力のある人。30 歳くらいまでに子どもを 2 人か 3 人産む。2 人の場合は男の子と女の子、3 人の場合は男の子 2 人と女の子 1 人。育児から手が離れたらパートタイムの仕事にでる。夫とは友だちのような、あるいは恋人どうしのような関係でいたい。家庭は、仲良く休日には家族揃って出かけ、コミュニケーションの多い温かいものにしたい。夫にも家事を分担してもらう。仕事の疲れがいやせるような家庭の雰囲気を作りたい。庭付きの一戸建てに住みたい。親と同居するのなら、自分の親としたい。

以上が最大公約数的な回答である。新しいスタイルの家族形態はごくわず

か(5人)で、それらは、自分のために生きたいので結婚しないとか、気の合った友人同士で住む、1人で気ままに暮らしたいので子どもは要らない、結婚にこだわらず一生好きでいられる人と一緒にいられれば良い、などであった。

ここで、いくつか特徴のある例を挙げておく。

☆ 24歳で結婚。25歳で女の子を産み、4年後男の子を産む。子どもに寂しい思いをさせたくないなので、なるべく一緒にいてあげたいが、子どもが大きくなったら自分の生きがいを見つけ、すばらしい老後を送りたい。

☆ 私としては、結婚してもすぐには仕事を辞めずにいて、子どもができたらしばらくは育児に専念して、子どもが小さいうちは子どもとの時間を大事にしたいです。それから育児から手が離れたら何か福祉関係の仕事に就きたいです。だから今のうちに将来役に立つような資格が取れるといいと思います。

☆ 私の両親は仲がよいほうなので、母がパートで疲れている時など父が代わって洗濯をしたり、洗いものをしたりしています。私も家庭を持つようになるなら、理解のある人と結婚し、両親のような家庭を築いていきたいと思います。

☆ 私自身両親共に仕事をしているので、子供にはそういった事をしてあげたくない。親が考えているほど子供は強くありません。仕事と家庭の両立なんてあり得ません。犠牲になるのは、いっだって子供です。女性は家庭に在るべきです。

☆ 夫に依存し頼りきるのが当たり前、というような関係でなく、夫婦共々一緒に生活するための費用を稼いで、良い意味でのパートナーのような関係で生活していけることを望んでいます。

☆ 将来結婚するかも出産するかも今の段階ではまったく想像がつかない。今の自分には自分によってつくられる家族というのは不必要である。自分のために生きるのであって家族のために生きるという生き方だけはしたくないと思っている。

将来の家族生活を描くとき、やはり現在の家族におけるこれまでのさまざまな経験が基になっているようである。

V. 終わりに

アンケート調査の結果は、女子短大生からみた今の家族の親子の様相を浮き彫りにした。特に新しい側面がみられたわけではないが、子どもの社会化の担い手としての母親のあり方、父親像の学習の仕方など検討すべき問題が

多く存在することが再認識された。つぎには、男子学生からみた家族像，さらには父親，母親のみる家族像も調べて，総合的にこれからの家族形態に迫りたいと思う。

引用文献

- 1) 樋口恵子「国際家族年の理念見失うな」，朝日新聞朝刊『論壇』，1994年3月18日
- 2) Murdock, G. P. *Social Structure*, New York, Macmillan, 1949
- 3) パーソنز, T. とベールズ, R. F., 橋介貞雄他(訳)『核家族と子どもの社会化』黎明書房, 1970 (Parsons, T., & Bales, R. F., “*Family: Socialization and interactions process*, New York: Free Press, 1955
- 4) 詫摩武俊・依田 明『家族心理学』川島書店, 1972
- 5) 菅原真理子『新・家族の時代』118頁, 中公新書, 1987
- 6) 佐竹宣夫「友情と仲間」宮川知彰(編著)『青年の心理と教育』, 放送大学教育振興会, 1988